

## 第12回教育懇談会議事録

日時：平成28年2月10日(水) 10:00～12:00

場所：愛知県庁本庁舎「正庁」

<大村知事>

皆さん、おはようございます。本日は、お忙しい中、教育懇談会に御出席をいただきまして、ありがとうございます。今回は、第12回目ということでございます。

今回の懇談会は、初めてこの愛知県庁の正庁で開催をいたします。正庁というのは、正しい庁と書くのですが、要は正面にある部屋という意味でございます。昔、戦前の建物には大体、正面の所に儀式をやるという意味での正庁というのがつくられております。名古屋市役所も、正面の上の5階に、もうちょっと小ぶりですけども、正庁があります。愛知県も、戦前、昭和13年にできた時から使っておりまして、いろいろな会議とか式典をやっております。時代を感じさせる所でございます。できた当時は2つの大きな巨大なシャンデリアがあったんですが、戦争中の金属供出でなくなっております。あちらに、天皇陛下の御真影、普段はカーテンを閉めて、儀式の時は開けてやっていたという名残りが残っております。2～3年前までは、県庁は部屋が足りないというので、ここに機材を打ち込んで、床も貼り、防災センターとして使っており、私は「けしからん」と言っていて、隣の建物にどけて、11月から復活をさせたということでございます。一昨年12月に、愛知県庁は名古屋市役所と一緒に国の重要文化財になりましたので、それにふさわしい使い方をしっかりとやっていければと思っております。

今日は前置きが長くなりましたが、本日の参加者の方でございます、学校法人河合塾の人事異動に伴いまして、今回から、中部本部長の室崎欣彦様に御出席をいただきます。よろしく願いいたします。また、特別参加といたしまして、漫画家の江川達也様に今日も御出席いただき、ありがとうございました。皆出席でございまして、地元愛を、名古屋愛を、愛知県愛を感じます。よろしく願いいたします。今日は、シティズンシップ教育の推進に向けまして、日本シティズンシップ教育フォーラムの副代表で、京都教育大学教育学部教授の水山光春様に御出席をいただきました。よろしく願いいたします。

前回は、子どもの体力向上やスポーツ振興について、御議論いただきました。皆様からは、幼児教育から体を動かすことやスポーツ選手と触れあう機会の重要性など、御提言をいただきました。しっかりと生かしていきたいと思っております。

今日の議題は、「児童生徒の市民性・社会性を高めるシティズンシップ教育のあり方」ということでございます。昨年6月の公職選挙法の改正を受けまして、今後の主権者教育のあり方のほか、道徳性・社会性の向上、ボランティア活動を始めとする積極的な社

会参画を促す教育の充実など、社会を形成する市民として必要な資質・能力を身に付けるための教育、シティズンシップ教育のあり方について、今ももう既に様々な形で各学校、小学校、中学校、高校で、地域との関わりとか、社会との関わりとか、いろいろな形で工夫をしてやっていただいておりますが、改めて公職選挙法の改正で、今年の7月の参議院選挙から、18歳から選挙権ということで、高校生も一部対象になるということで、どうしようというような話がいろいろ出ております。私は、これは良いことだと思いますし、大いにそれぞれの学校で工夫していただいて、学校側、先生側、そして生徒さんも含めて、いろいろなやり方があると思って良いと思います。私は、学校の中ですから、組織というか学校現場での物理的なことも含めて、自ずとそういう一定の範囲内とか、枠というのがあるのかと思いますが、その中でも、私はできるだけ自由に、自由闊達<sup>かっ</sup>に、いろんなことをやっていただければ良いのではないかと思います。そういったことも含めて、幅広い視点から御意見を伺っていただければと思っております。

大所高所からの、また御専門のお立場からの、率直な御意見をお願いいたしまして、御挨拶とさせていただきます。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

〔事務局から出席者紹介〕

<大村知事>

それではですね、懇談会に入ります。

まずは、お手元の資料について、事務局から簡潔に説明をいただきます。

〔事務局から資料説明〕

<大村知事>

今の現状ということで説明がありましたが、それはそれといたしまして、それでは皆様から、これからの社会を形成する市民として必要な資質・能力を身に付けるための教育、シティズンシップ教育のあり方について、御意見を伺ってまいりたいと思います。

最初に、シティズンシップ教育の推進に向けた活動に取り組んでおられます、水山様から、シティズンシップ教育の意義や動向などについて、御意見を伺いたいと思います。

それでは、水山様、よろしく願いいたします。

<日本シティズンシップ教育フォーラム副代表・京都教育大学教育学部教授 水山光春氏>

お手元にレジュメを添えておきましたので御覧いただきたいと思います。スライド(資料)の2枚目と3枚目を合わせて御覧いただきたいと思います。よく、中教審とかあらゆる場所で、子どもたちの姿ということでいろいろなデータが示されます。最近はまだ

一つ新しいデータが示されることもあるのですが、私は使いやすいのでこのデータを使っています。日本とアメリカと中国と韓国という四つの国の、これは中学3年生と高校1年生ぐらいの子どもたちを対象に質問した大規模なアンケートの結果です。よく出てくるものです。

『あなたは自分自身をどう思うか（私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない）』という問いに対して、「①全くそう思う」、「②まあそう思う」、「③あまりそう思わない」、「④全くそう思わない」という選択肢で聞きますと、2ページのようなデータになったと。

それともう一つですね、『青少年が社会問題や政治問題に参加することについて、あなたはどう思いますか』という3ページの方ですけれども、「①参加すべきだ」、「②参加したほうがいい」、「③参加する必要がない」、「④参加しても無駄なことだ」という四つ選択肢で聞きますと、3ページのような結果になったと。

ということで、よく引き合いに出されるのは、スライド（資料）の3ページの方なんですけど、これでもって、日本の中学・高校生、若者たちは政治に対する参加意欲は低いんだと、よく引き合いに出されるデータとなっています。

でも、こればかりが、わりと一人歩きしている傾向があるように思います。上と下を両方合わせて見てほしいのです。ここで問題なのは何かといいますと、3枚目の方ですが、青少年が社会問題や政治問題に参加することについてどう思うか聞かれたときに、「①参加すべきだ」と「②参加したほうがいい」を合わせた数字は、日・米・中・韓でほとんど差がないのです。一方で、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という問いに関しては、日本がガクンと下がっている。

これはいったいどういうことなのか。私の解釈では、子どもたちは頭では参加したほうがいいと分かっているのだけれども、いざということになるとできないのだということだと思っただけです。ただ単にできない、やりたくないということではなく、頭では分かっているのだと。そのところが非常に問題だと思っただけで、それをどうやって変えていくのかということになるのだと思っています。

それで4ページを御覧いただきたいと思うのですが、そこに「クリック・レポート」とあります。これは、世界で一番最初にシティズンシップという教科を必修化したイギリスで、その導入に当たって中心的な役割を果たしたバーナード・クリックという政治学者が委員長となり、とりまとめた、シティズンシップ導入に関する報告書のことをいいます。あちらでは、委員会の委員長などをした方に敬意を表して、報告書に名前が付けられますが、実物は、7ページに写真を添えておきましたが、赤い表紙のレポートで、80ページほどの、それほど分厚いものではありません。

世界で一番最初にシティズンシップ教育を導入したといわれるのがイギリスです。世界的な傾向については、先程、事務局が資料におまとめいただいたように、いろいろな

国で、いろいろな形で、そのような教育が始まりつつあります。そして、クリック・レポートでは、シティズンシップ教育について、次のように定義がされています。

少し重なりますが、私なりに整理するために申し上げたいと思います。公立・私立中等学校におけるシティズンシップ教育の目的は、以下の通り、「参加型民主主義の本質や実行についての知識や技能や価値を確実なものにし、かつ増大させる。」「子どもたちがアクティブな市民に成長するのに必要な、権利と義務、責任の感覚への気づきを向上させる。」「上記のことを通して、個人や学校、社会に対するローカルかつより広い共同体レベルでの参加の価値を確立させる。」と、クリック・レポートでは述べています。これが、私たちがシティズンシップフォーラムという形で活動を進める一つの大きなベースになっています。要するにキーワードは、下にイギリスのナショナルカリキュラムが出来ていくのですが、参加型の民主主義をどう実現するのかということと、アクティブな市民、能動的と訳したり、積極的と訳したり、活動的と訳したりしますが、アクティブな市民をどうやって育てていくのか、ということです。実は、政治教育は世界中やっているわけで、日本でもこれまでやってきました。シティズンシップ教育の一番の眼目は、これまで政治教育はやってきたが、それで十分に参加型の民主主義を支えていくようなアクティブな市民を育てるまでには至らなかった。じゃあ、どうすればいいのかという問題意識から始まっていると御理解いただけたらと思います。

我が国では、経済産業省のシティズンシップ教育研究会が、「シティズンシップ教育宣言」を2006年に出しました。これは、非常に良く出来ているもので、我が国のシティズンシップ教育が進んでいくべき方向を上手に示していると思います。「多様な価値観や文化で構成される社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、より良い社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的に関わろうとする資質」と、シティズンシップ教育研究会は定義をしました。多様な価値観、自己実現、より良い社会の実現、意思決定、権利、義務、積極的に関わる等々、必要なキーワードをきちんと組み込んだ非常に良い定義になっていると思います。経済産業省ですから、右側に円を添えましたが、「教育宣言」の中に載っていますが、「経済活動」が大きな円としてあります。クリック・レポートでは「経済活動」はあまり大きく言いませんので、そこが少し違うところだろうと思います。いろいろ定義等がありますが、私なりにまとめますと、個人と社会の関係のあり方、それから個人と社会の関係の持ち方、つまり、より良い関係の持ち方ということに価値観が少し入りますが、それについて、どうあればいいのかということや学ぶ教育、それをシティズンシップ教育と言っていいと思っています。そこで、個人と社会と言いましたが、個人のあり方も個人がどうなっているのかということと同時に、社会の意味、それから社会の性格や特徴、これは実に様々になりますので、社会をどう捉えるのかということやシティズンシップ教育の中身も変わってきます。

世界的に今言われていますのは、従来はシティズンシップ教育の要素としての権利や義務が中心だったが、それが参加やアイデンティティという右側の方にシティズンシップという意味の捉え方そのものも変わりつつあるのではないのかと言われておりまして、ほぼ定着していると言ってしまう言い過ぎかもしれませんが、一般的なシティズンシップ教育研究者の間での共通了解になっていると思います。

それでは6ページにまいります。今、話したことをベースにしてシティズンシップ教育を考えていきますと、シティズンシップ教育というのは、「人に任せて文句を言う」、そのような社会や個人というものを、もしもこれまで政治教育が育ててきたとしたら、そういうものから、もう一歩進んで、「引き受けて考える」ような社会や個人への変革を目指していく教育なのだろう。シティズンシップ教育の政治的な教育の概念そのものを少し変えていくことが、大事だろうと思います。その時に、自立だとか、参加だとかいわれる市民としての批判的精神みたいなものが非常に重要です。一方で、責任とか、社会に対していかにコミットメントして奉仕していくのかという、国民や市民としての自覚のようなものも必要ですけれども、従来ともすれば、右下の国民としての自覚を持って、市民としての自覚を持って、世の中のことを引き受けて考えろという形で、右下の方に重点をおいて言われる教育が多かったかと思います。一方、批判的精神を持っている人は、任せて文句を言うという、左上の方でもあります、くっつきやすいと。アンバランスな形で政治的な教養の教育というのが進んできた感じがするのですが、それを市民としての批判的な精神を持ちながら、一方で自覚も持ちながら、引き受けて考えられるようなそういう子どもたちをどう育てていったらいいのだろうかというのが、シティズンシップ教育の非常に大きな課題になるのだろうと思っております。

また先ほどのクリック・レポートに戻って恐縮ですが、7ページのところをご覧いただきたいのですが、シティズンシップ教育のどういう要素を組み込んで、どういう教育の柱に基づいて進んでいくのかをクリック・レポートでは、要素、教えるべき内容ですね、それから基本的な精神みたいなものをサイコロみたいな立方体と3つの「社会的道徳的責任」「コミュニティへの関わり」「政治的リテラシー」というストランドで述べております。ここで言っている「政治的リテラシー」は、自民党とか、民主党とか、どここの政党について勉強するとか、そういうものではありません。平べったく言いますと、もめごとや調整というのは、政治の世界だけにあるわけではないでしょ。学校の中にもあるでしょ。もっと言えば家庭の中にもあるでしょ。お兄ちゃんとお姉ちゃん、お兄ちゃんと妹の間でのもめごと、そういうもめごとを調整していくことも、それも十分な「政治的なリテラシー」ですよと、そういう考え方に立っていますので、ここで言っている「政治的なリテラシー」というのは、必ずしも社会の政治的な政党や政治に関わるものであると考えるまいと思っております。

それを私なりにシティズンシップ教育を説明するために作ったものが、8ページの「シ

ティズンシップ教育の構造」です。要するに、知的な市民を育てるだけでなく、能動的な市民に育てて、さらにその先の「こんな自分でも社会の役に立ちますよ。社会のためにいろいろなことができますよ。」という社会的な有能感のようなものに引き上げていくためには、左側の価値観、思慮深さ、責任感、知識・理解、技能、価値が要素となります。左側の要素的な説明をすると、学校の先生はよく分かるのですね。「ああ、こういうものを育てて行けば良いなんだな。」と、よく分かってもらえるのですが、実はそれだけじゃなく、クリック・レポートで言っている大事なことは、右側の社会的道徳的責任とか、今、少し申したような政治的リテラシーみたいなものでコミュニティに関わっていくという実際的な活動を通して、その両輪で攻めて行かないと上手に育ちませんよということで、左側一方でもだめだし、右側一方でもだめだし、両輪でもって知的な市民性だけじゃなく、それを能動的なものにどう変えていくのか、ということがシティズンシップ教育の大きな課題になっていると思います。

9ページに「シティズンシップ教育の整理」という形で載せさせていただきました。これは、先ほどの経済産業省のシティズンシップ研究会が、シティズンシップ教育宣言の中でシティズンシップ教育を整理しているものです。これも上手な整理だと思います。具体的にどんな場所でシティズンシップ教育がどんな形で行われているかという形の整理になっています。ですが、これではシティズンシップ教育の場面、主体は分かるのですけれども、どのような内容が行われるのかということがちょっと分かりません。そこで10ページに私なりに整理させていただきました。

シティズンシップ教育を「学び方」と「目標」、2つの軸で整理をさせていただきました。「知ることによって学ぶ教養的な市民性」「為すことによって学ぶ実践的な市民性」を縦軸。それから、横の軸に「狭いシティズンシップ」「広いシティズンシップ」と書きました。「狭いシティズンシップ」は、国政や地方政治を自律的に支える個人としての市民性、要するに個人あつての社会という形でそれを定める。「広いシティズンシップ」、これは社会に変化をもたらすことに能動的に関わりたいとするような公共人としての市民性、社会あつての市民、個人という形で、少し大雑把な分け方ですが、これまで私たちが、社会科等も含めてやってきたのは、どちらかと言えば「小さなシティズンシップ」を育ててきたんじゃないかと思っています。今求められているのは、「大きなシティズンシップ」。これをどういうふうにつけていくのかというのが、大きな課題になっているんじゃないかと思っています。その背景としては、現代社会の姿として、社会も変わり、個人もどんどん変わっていくなかで、「大きなシティズンシップ」をどういうふうにつけていくのかということが大事になっていると思います。

11ページをご覧ください。今いろいろと申してきましたが、それを教室と社会の関わりという形で見ますと「社会を認識の対象にとどめて教室の中で社会を見て行く」、これを「社会認識型」としますと、「静的なシティズンシップ」の勉強というのはこれにな

るんだらうかなと。これまで、学校の教室で公民の授業とか、社会科で行われていたものはかなりこれに近いと思います。「動的なシティズンシップ」という時には、教室を出て社会に積極的に働きかけていくタイプの「社会参加型」のもの。それから、教室に社会を呼んでくる「シミュレーション型」のもの。教室そのものを熟議の空間、討議の空間というふうに捉える、私は「教室を社会に型」と呼んでいます、「動的なシティズンシップ」を教育していこうという時でもいろいろな方法があると思います。先ほど少し見せていただきました「WiLL Seed 通信」で行われているのは、私から見ますとシミュレーション型の教育なのかなと理解をさせていただきました。では現実にはどうかということを見て行くと、シティズンシップは現実にはすでに行われております。お茶の水女子大学附属小学校は、「教室を社会に」という形で教科「市民」というものを設けており、積極的に適切な社会的な価値判断、意思決定していく力を育てたいと考えてやってきました。埼玉県桶川市立加納中学校という学校は、中山道沿いにありまして、桶川という駅がありますが、駅前にはシャッター街になっています。そこで、桶川の駅前をどういうふうに再開発したらいいのかということのを子どもたちが工程表、マニフェストの形で作りまして、それを地域の方々、郵便局長さんや商工会長さんや主婦の方とか、いろいろな方々に来ていただいて、子どもたちの発表を評価してもらおう。そのような教室に社会をもってくるタイプのものがあります。東京都品川区は、「総合型」という形で、道徳、特別活動、総合学習をミックスした市民科というものを立ち上げていまして、これは社会科の教科とは別にやっていることであります。

一番最後の16ページになります。以上のことを申してきましたが、「それぞれの学校でシティズンシップ教育を」と私が申しますと、校長先生たちは「時間が無いんだ。今さら、新しい教科をいれている余裕は無い。」とかなりおっしゃります。けれども、私が申し上げたいのは、新しい教科を作ってくれと言っているのではない。「これまでの教育をシティズンシップという観点で見直してみたらどうですか、整理をし直してみたらどうですかと。そうしたら、新しく見えてくるものがあるのではないのでしょうか。」ということをお願いしたいと思います。そして、シティズンシップ教育が対象としている領域がどこかということになると、卵の形で色を付けてある所がシティズンシップ教育の領域になるのではないかと、思っております。

少し雑ぱくですけれども、最初のお話とさせていただきます。

<大村知事>

ありがとうございました。また、水山先生に後ほど御意見をお伺いしたいと思います。

それでは、このあとは名簿の順に、江口様から御意見をお伺いしたいと思います。それでは、江口様、お願いします。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

シティズンシップ教育、なかなか難しいテーマですが、一般論として、このシティズンシップ教育というのは重要性が高いし、増しているということは改めて申し上げるまでもないと思います。私も大学教員をやっております、最近、学生の力を伸ばすためにアクティブラーニングをさせる、課題を発見させて、それをどうやって、解決のための方策を自分たちで考え、具体的なアクションをしていくかという点では、教育効果も非常に高いものですし、それは、もちろん大学だけじゃなく、どんどん高校、中学、小学校と下に降ろしていくという方向になってますが、個人の成長、それから社会のクオリティを上げていくという点では、大変重要だということは当然だということです。

(児童生徒の市民性・社会性を高めるシティズンシップ教育に関する取組) 9ページに資料がある、国が作ったテキスト「私たちが拓く日本の未来」、高校生向けに配られているこの副教材は、ネットにあがっていたものですから、私も初めて読みました。大変よくできていると思います。こういう教育、これはいわゆる広い意味でのシティズンシップ教育もそうなんだけれども、他に特に有権者になると、政治に参加していく若い子が増えていくということで、それに対して様々な、模擬選挙とか模擬請願とか議会とか、やり方とかを学ぶ場を、教材を作ってそういう場を作っていこうというのは、納得できるということなんですが、一つ、どうしても気になることがございまして、それは、先程、水山先生の分類の中で、シティズンシップ教育の中身で三つあって、最後のところに政治的リテラシーというものがありました、要はこのところがおそらく最も議論になっていくところなのかと。つまり、どういう形で子どもたちに政治というものに触れさせていくのか、参加させていくのか。それを教員がどう関わっていくのかというところがポイントになると思います。

一言で言うと、今の感じというのが、何て言うかアクセルとブレーキを両方とも一遍に踏んでいるように、私には見えてしまうところがあります。まず、文科省のほうは政治的教養、教育をやっていこうと、特に有権者の年齢も下がっていくので、そういうことを学校でも教えていこうという一方で、お手元の資料(児童生徒の市民性・社会性を高めるシティズンシップ教育に関する取組)の10ページのところに文科省の通知の内容が書いてありますが、「政治的教養を育む教育」の中身の3番目の○のところで、「教員は個人的な主義主張を述べることは避け、公正かつ中立な立場で生徒を指導。」とある。これは確かに分かる、言いたいことはよく分かるのですが、うちは大学ですが大学に限らず教育の中で、今、大変こういう方法が重要だというやり方の一つに、クリティカルシンキングという言葉があります。要は、批判的に物事を考えましよう。これは、先程のアクティブラーニングと並んで、教育的な意味において大変重要だと思って、私もこのクリティカルシンキングというのを意識して学生に接しているんです。どうしても批判的思考なものですから、今起きている様々な社会の課題、問題提起について、まず



最初に批判的に、「これって、どうしてこうなっちゃっているの」というところから入っていくんですね。そうすると、その表面だけを見ると、そういうアプローチの仕方は、それは今の現実でやっている政治に対して批判的なことを教えているのではなかろうかというふうにとられかねない、ということがあります。大学ですから、うちの場合はそんなに問題にならないと思いますが、それが高校、中学になると、そういうのに対して大変、何と云うか自制的になってしまいがちではなかろうかと思います。

特に「教員の個人的な主義主張を述べることは避け」と明確にバチッと書いてあるわけなんですけど、ここで重要な「個人的な主義主張を述べることは避け」というところは、ポイントとしては自分以外の、教員以外の考えというのを容認する、こういう考え方もあるよ、こういう考え方もあるよ、ということ許容することは絶対必要だし、それは大事なんだけど、そこのところで教員が何一つ、個人としてこのテーマについてどう考えるか、どう向き合うのかっていうことを言わないって教育が成り立つのか、あるいは教育としてクオリティが高いものをつくっていきけるのだろうかということが大変気になるところであります。ここのところというのは、実際の現実問題としては運用の話になると思うんですね。学校現場でどこまでそういう個人の先生の考え方っていうのを抑えていくのか、あるいは、というようにところが大変重要になるわけですけども、そこのところはこれからという話になるかと思いますが、あまり厳格に運用していくと、却って、もの言えぬ子どもたち、もの言えぬ社会というものを作っていくことになりかねない危険性をはらんでいるんじゃないかなと思います。

もう一度発言の機会があると思いますので、とりあえずここではこれだけにさせていただきます。

#### <大村知事>

ありがとうございました。江口先生が最後に言われたこと、私も同感です。個人の意見を言わずに、こういうのがありますと（言っても）説得力がないのではないかと。あまりそういうことを言っただけではいけないという声もあるようですが、私は全く違うと思います。できるだけ自由に、何を言ってもいいじゃないかと。おのずと学校の中での制約はありますよ、街頭で演説するのは違うので。あれ言っただけではいかん、これ言っただけではいかんと、政治的中立性がと、あまりそれを言うと、それならそれを書いてある本を読めばいいじゃないかということですよ。血の通った教育ではないのではないかという気がいたします。いろんな御意見があるようですが、私は、現場は自由に、自由にどんどんやっていただいたらいいと、政治的教育を含めてね、おのずと制約はありますけどね、と思っております。あまり行き過ぎたら、必ず文句が出るから。やりすぎると批判されるから。それで、より良い方向に収れんしていくのではないかと思います。

それでは、柴山様、お願いします。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

先ほどの水山先生のお話、大変勉強になりました。よく分かりました。

現在、小中学校でやっている取組とか、今後高校で進めようとしている道德教育なんかも、ぜひやっていただきたいと思っています。私どもの調査で、新しく会社に入った新人に対するイメージを調査しているのですが、基礎学力の低下も非常に大きな問題ですが、もう一方で、社会性や自主性、主体性、こういったものが従来から落ちたという回答が、本当に従来あったのかというのはいろんな問題があると思いますが、そういったものについての批判、心配する企業の声が非常に高いので、参加するという意識を高めていただくことは非常に大事ですし、社会性とか公共性、規範意識を同時に学校で教えていただければ、大変ありがたいと思っております。

先ほどの水山先生のお話の中で、どうしていいか分からないということが最初に指摘されましたが、ひとつは、今の高校生、若い人が、今の日本が抱えている社会問題、経済問題について、あまり深く自分のこととして考えていない、どちらかというところがあると思います。ここは、一つの方法として、今、社会保障もそうですし、少子化もそうですが、もう少し、自分のこととして考えてもらえるように外部の講師を使って、分かりやすく自分の課題として考えていただくような授業を1回でいいのでやっていただくといいのかなと思います。教科書的に習ってしまうと、難しすぎてさっぱり分からないとなってしまうので、現実起こっている様々な事象をあげながら、中学生高校生に分かりやすく説明するということが、自分のこととして考えていく第一歩であると思っています。私どもも、高校生に対して出前授業を少しやっておりますが、そういったものもぜひ使っていただいて、実際に社会で活動している実務家を呼んで、分かりやすく説明していただくということが大事だと思います。

もうひとつ、小学校中学校、高校生が、少しずつ大人になるにしたがって、社会との関わりを体験していくことが大事だと思います。今見ていると、小中学生、高校生は、学校の中での勉強だけとなって、家の手伝いもしなければ何もやらないと聞いています。そういったことから始めて、学校周りの掃除だとか、社会的な公共マナーを実践していただく、例えば、自転車置き場の整理とか、電車とかエスカレータのマナーといったことを、少しずつ覚えてもらうということが、大事かなと。成長にしたがってレベルを少しずつ上げていって、自分でも体験してもらう。学生は特別扱いという風潮が最近強いので、ぜひ、機会を作ってやっていただければありがたいと思います。

最後に、私ども企業として若い人を預かるのですが、非常に困っているのは親御さんの問題です。親御さんがなかなか子離れしないというのは、会社も困ります。多分、学校はもっと困っていると思いますが、親世代の教育というのは、学校に全部押し付けて

はいけません、何かの機会に、少しずつ子離れするように、小学校中学校と上がるごとに、親御さん世代を指導していただくとありがたいと思っております。以上です。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

私は教員養成をやってきましたが、教員は教員の考え方をもっと持つべきだということは事実です。また、教員というのは、自分の意見を述べるだけではないことは事実なので、一人一人の違いをどう認めるかということが大事であり、違いを違いとして認めることがシティズンシップ、市民性だと思っています。やはり集団生活をしているので、その中で違いを受け止めることをどうするのが市民性につながるものであり、そこがないと社会が成り立たないと思います。

ただ、違いを違いとして認めるのが今の社会かということ、ある意味、逆になっているのではないかと。どういうことかと言いますと、前にも申し上げたかもしれませんが、例えば、社会が豊かになればなるほど、実は個人の世界にみんな入っていくという、共通性があるのだそうです。豊かでないときほど、みんな協力していた。地域もかたまっていた。しかし、社会が豊かになっていくとみんな個人の世界に入っていく。社会の流れと個人の流れは逆方向になっていると考えられています。そういった中で、どういうふうにこちらが狙っているような、社会性や道徳性を高めていくかということをやっつけていかなくてはならない。特に、道徳教育も関連するわけですが。これから、公共性に関する教科が入ってきたとしても、先ほどの水山先生の報告にもありましたように、観念としての道徳観はできているのです。やっちゃいけないことは、みんな分かっている。選挙に行った方がいいということは分かっているわけです。ところが、なぜかそこから一步出られない、何かが養われていない。そこで、いろんなところで、例えば、学校で模擬的なことをやったり、一遍、いろいろなことに参加したり、あるいは地域の活動に参加してみようと、子どもたちの背中を押してやることです。今もそういう活動が、県内でも、地域との活動など、いろいろ行われています。そういうことも含めて、もう少し学校での活動をもっと宣伝して、教育していくことをやっつけていかないといけない。今は、多分、学校ごとにやっている活動が案外多いように思われますが、それがもう少しあちらこちらに広がっていけばいいのではないかと感じます。

先ほど、家庭の問題が出ましたけれども、家庭内社会という言葉があります。家庭の中が一つの社会になってしまっている。親子のつながりが強くて、会社の初出勤の日に親がついて行って、上司にあいさつしたということも出ているわけです。子どもたちにとっては、学校も社会です。それから広く言えば、地域社会。この家庭内社会から成長していくにつれて、それぞれの社会にどう脱皮していくか、その脱皮がうまくいかないところをどうしていくかということです。上の学校は、下の学校の活動を引き受けるわけですので、そのところの連携をやっつけて、下の学校で何を学んだかを伝えていかない

といけない。それぞれの学校段階だけでやっていたら成長につながっていかないと思います。

それから、高校と大学の関係もあります。大学入試が段々変わりつつありながらも、大きくは変わらないわけです。教科はある程度、独立型なので、横のつながりがある教科が案外少ない。小学校、中学校で総合的な学習の時間というものがあります。お茶の水女子大学附属小学校の取組も総合的な学習の時間を使っていますよね。

<日本シティズンシップ教育フォーラム副代表・京都教育大学教育学部教授 水山光春氏>  
社会の時間でやっていると思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

教科の時間を使う場合もあるのですが、総合的な学習の時間など、横のつながりについての認識を先生方が持つということが大切ですし、社会のことを総合的な時間でも教えていくという関係でやっていかないと、広い意味での市民性が育っていかないのでないかと、そんな感じがしております。

道徳も教材を読みこなすというレベルで終わってしまっているという傾向が多少ありますので、やはり先生自身がその教材を日常の中でどういうふうを考えているかをしっかり把握して、自分の生き様を子どもに示しながら、いろいろな意見を取り上げていくということが道徳教育だと思っています。また、その辺のところは、また時間がありましたら述べさせていただきます。以上でございます。

<学校法人河合塾中部本部長 室崎欣彦氏>

よろしく申し上げます。私、資料を用意させていただきました。今日のテーマをお聞きし、これはえらいことになったぞと。多分予備校が出て行くと「お前たちのせいだ。」というようなことになるのではないかと。「いわゆる偏差値のせいでこうなっているんだぞ。」みたいなことになるのではないかと思ったのです。河合塾の取組としては、我々も具体的なことをいろいろやっています。

なぜ河合塾がこういうことをやっているかと言うと、最終的には大学入試とかそういうところで、一番必要なのは、本人の動機付けです。ちょうどAO入試なんかどんどん入ってきて、これからも多くなっていくわけですが、必ず聞かれるのは、「あなたは、なぜこの大学のこの学部を志望しましたか。」ということ。ここが言えない。こういうことについて我々は、もっと自分たちがそこを掘り起こして行って、子どもたちの動機をどう導き出すか、ということをしなきゃいけないといろいろやっているわけです。

この資料のパワーポイントの方をちょっと御覧いただきますと、2ページ目のところで、1、2、3とありますけれども、一つは「いきいきゲーム」というビジネス・シミ

ュレーションゲームをやっております。これがカラーの緑色の資料になりますが、子どもたちをグルーピングして、ある仮想の国を作り、その国の中で、その国がどう関わっていくかとか、ゲームになっていまして、最終的には一番儲かった国が勝ちとなるわけです。そういう中で導入があって、体感があって、気づきがあって、次の行動があって、こういうものを実際にやりながら社会にどう関わっていくのかとか、世の中はどのような仕組みで動いているのかとか、そういうことをちゃんと体験しましょう、みたいなことをやったりするのです。

これをやる意義というのは、子どもたちにそういうことを体感させるというものもあるわけですが、小学校5年生ぐらいから高校3年生ぐらいまで使える手法です。子どもたちと一方で、こういうことを教える先生を育成しなければいけない、ということもありますので、このプログラムは、子どもたち用だけじゃなくて、教員養成系のプログラムにもなっているのです。こういったものを作ってやっていると、実際に受けた子どもたちも「自分になりたいという職業がなんか見えてきた。」というようなことを言うような子がいたり、ここの8ページあたりにちょっと子どもの声として出していますが、「社会の仕組みや仕事の難しさがよく分かった。」なんていう子もいたり、それから、「コミュニケーションって大事なんだね。」ということが分かったと。これは自分たちのグループ内でもそうですし、相手になる他国のチームとのコミュニケーション、あるときは協力者だとかが必要だってことが分かってくる。

次の9ページ目には、それを実際に参加した先生たちも、生徒を見る目がこれまでと変わってきた。非常にやる意義があるんだということがあつたりですね。こんなことを通じて、我々も河合塾グループの中で何ができるかということのを常に考えているということが一つ。

それから、10ページ目の「K-PRO (ケープロ)」というこれはまた別のコースなんですけど、これは、特色としては、ある教科にものすごく興味を持って、そこをかぶりついていく子どもたちっていうのは必ず出てきます。例えば、ぶっとんだぐらいの物理の力を持っているだとか、そういう子たちは、普通の学校の授業の進度とは合わなくなっていて、でも、そういう子たちは、伸ばしていかなきゃいけないし、その子たちにいろんなことを教えなければいけない。というのは、その子たちは、ちょっと特殊な能力を持っているものですから、コミュニケーション能力がなかったり、いろいろ問題があつたりするわけです。それを無学年でやることによって、「中学1年生を、高校3年生をぶっちぎるすげえやつだなあ。」というふうに見たり、逆に、もの言いがちょっとよくなつたりするときに、上の学年の人が、「そういう言い方をしちゃいかんよ。」と言って、ものすごく能力があるけれども、「それだけじゃだめだよ。」ということをお教えながらやっていくだとか、そういうのが無学年の特徴なんですけれども、そういうところでやっていく。

そういうコースがあって、中で特にシティズンシップということによって、11ページの全日本高校模擬国連大会というのがあって、これは英語でスピーチをするわけですが、ただ単に英語の能力だけではなく、12ページのところにまいますが、参加者が一国の大使として国際会議に参加するというシミュレーションなんです。そこでどういふことをアピールするかは、国際ルールということをちゃんと知らないと、ただ単にべらべらと英語がうまいだけではだめだよというようなことになってきて、これはなかなかすごい。ちょっと戻って11ページのところですが、このテーマに即して1チーム二人でペアを組んで、高校の単位で参加になるわけですけども、例えば、ここ何年かのテーマですと、核軍縮、児童労働、移民の政策について、というようなことがテーマになって、こういうことをスピーチしてくださいと。こういうことを我々は、いわゆる教養と英語を両方合わせて教育し、こういうところに参加する指導をする。なかなか高等学校の先生方、出たいというような子がいても、なかなか難しいのですね。そういうのを取り出してやっていくというようなことをやったりしています。

それから、15ページのところは、また全く別なんですけれども、いわゆる普段の予備校の授業を受けている子たち、浪人生も含めてですね、再教育と言いますか、ただ単に歴史なら歴史だけではなく、もっといろんなことを、知識をつなぎ合わせて、そのことをちゃんと系統立てて理解していきましょうという形で、中部だと明治村に生徒たちを連れて行き、明治村の中を見ながら歴史と文化と、それから理系の子たちも行くわけですけども、建築とか、いろんな幅広い教養も付けながら、それを今度は教科に戻し、その興味をもっと生かしていくだとか、理解を深めるだとか、ということをやったりする。これも社会に、現場に連れて行って、いろんなことを勉強させましょうということで、河合塾は偏差値だけの詰め込み教育をやっているのではない、ということの言い訳を一つさせていただきました。

<漫画家 江川達也氏>

河合塾、進んでいますね。なかなかすごいなと思いました。

最近の子どもは社会性が身に付いていないという認識を持っていると思いますが、私は、実は江戸時代が一番できていたのではないかと考えています。おそらく、江戸時代が、一番社会性というものが教育されていたと思います。藩校は、その藩において、政治の中心となる人をピックアップして育てるような場所だったので、学校がそのまま政治というものであったと思います。また、江戸時代は、家庭の中でも社会ができていたのですが、明治、大正、昭和、そして戦後になるにつれて、個人主義になってしまった。学校としては、保育園が一番社会性があるって、学校・学年が上がれば上がるほど社会性がなくなりました。これは、本音と建前が、年齢が上がれば上がるほど離れていってしまうということであり、従来の学校教育がやってきたことだと思います。

今、議論されていることは、それを昔の社会性のある状況に変えようという運動ではないかと思います。原点回帰みたいなことを行っていくべきではないかと。家庭の中ですら、本音と建前を分け、親子関係であっても本音をぶつけ合えない家庭があったりする。学校現場でも、先生の前ではいい子のような顔をして、実は裏でいじめているというような現状がある。こういった本音と建前が離れてしまっている状況を、より本音に近づけないと本来の社会性は身に付いていかないと思います。現状を見ると、本音を言っている場所はどこかという、ツイッターです。匿名だからできると言えますが、本音で社会に対する意見を言っていて、これによって社会性が意外に身に付いているということがあると思います。ほかにも、フェイスブックやラインがありますが、これらはすごく社会性があり、本音がある。これらはなんと呼ばれているかという、SNS、ソーシャルネットワークサービスと呼ばれていて、まさにソーシャル、社会という言葉が最初にあるのです。このように考えると、学校でのきちんとした教育は必要ですが、先生がやれるかどうか分からなのですが、ある意味で、SNS上でのリテラシーとか社会性というものを教育していくことで、社会性を身に付けることが達成されるのではないかと思います。

SNSで非常に危険なのは、これから、いきなり社会に出されてボロボロになって再起不能になってしまう子どもが出てくることだと思います。そこで、閉じたSNS、つまり学校や地域といった、子どもたちに優しい大人がいるSNSの場みたいなものを作って、そこから徐々に社会を広げていくというような取組があるといいと思います。学校教育の中で出てくるとは思いますが、小学生に対して、どうやってネットワーク社会に入っていくかということは教えていかなければいけません。果たして公共団体にできるかどうか分からないのですが、民間企業とも協力しながら、そういった新しいソーシャルネットワークサービスから社会との接点を持ちうるような取組も含めて、昔の日本のやっていた社会性教育というものを明治村に行きつつ取り組んでほしいと思います。本当は、明治村ってすごくいい財産なのですが、ほとんどの愛知県の人には行かないですよ。大村さん、もうちょっと明治村を宣伝したほうがいいのではないかと思います。

<大村知事>

やってます、けど。最近40万人前後？で推移している状況で、最近増えたといっても約60万人？ですね。土日は人が並びますけど。

<漫画家 江川達也氏>

結構空いていていいのですけど。実は、愛知県にいるときはよく入鹿池に行きましたが、明治村には1回も行きませんでした。東京に行ってから、明治村の価値を知りました。

<大村知事>

そういう人もいると思います。ありがとうございます。  
江川さんの漫画の読者は、高校生や大学生が多いのですか。

<漫画家 江川達也氏>

いろいろなジャンルのものを描いているので、想定読者を子どもたちにしたときもありますし、社会人とかにしたこともあります。

<大村知事>

子どもたちを想定読者としたときに、意識して描くことはありますか。

<漫画家 江川達也氏>

すごく意識していますよ。あまり難しいことを描くべきではないとか、子どもが喜ぶダジャレやギャグを入れるとか。受ける漫画というのは、だいたい方向性が決まっていると思います。

<大村知事>

ありがとうございました。それでは、一巡しましたので、先ほどの皆様方の御意見を参考にしながら、もう一度水山先生から御意見をお願いしたいと思います。それではどうぞ。

<日本シティズンシップ教育フォーラム副代表・京都教育大学教育学部教授 水山光春氏>

失礼致します。いろいろ、御教授に富む御意見をありがとうございました。

私は特に今、江川さんがおっしゃった本音と建前の話は、まさにその通りであると思います。これもまた調査で恐縮ですが、「先生が言っていることをどの程度批判できるか」という調査がありまして、日本の先生は世界標準から比べて、「先生の言っていることを批判していいですよ、もっともっと批判しなさい。」と言うのだけど、実際子どもたちは「先生を批判してはいけない。」と思っている割合が非常に高いという国際比較データがあります。

<漫画家 江川達也氏>

「批判していいよ。」と言っておいて、本当に批判すると凄く怒りますからね。

<日本シティズンシップ教育フォーラム副代表・京都教育大学教育学部教授 水山光春氏>



と、いうことですね。そういうデータが出ていまして、日本の学校の教室空間における、きつい言葉で言えば権力という問題、権威と権力のはき違えみたいところを、もうちょっと教育の場では問わなければいけないんじゃないかなという事は思います。

それから、先ほど江口先生が随分御批判されたんですけど、副読本がありますよね。副読本を作った人達もよく知っているんですけども、実は非常に大きな問題がありまして、何かと言いますと、この副読本、コピーを添えていただき非常にありがたいのですが、事務局が資料を準備していただいた9ページですけど、「主権者教育」なんです。やりたいのは主権者教育です。ところが、副読本の表紙を見ていただくと分かるように、そこには「有権者として」と書いてあるのです。ですから、有権者教育と主権者教育が混同されているのです。有権者として投票するためには、守らなければならない公職選挙法とかのルールもあるし、それはやはり守るべきなんだけれども、それと有権者を越えて、より主権者、単に投票するだけではなくて、社会にもっと主体的に関わっていく主権者を育てるという意味と、これがごちゃごちゃになって書かれてしまっているのだから、「べからず集」みたいに読まれてしまったりするところもあるし、ここは書いた人たちも分かっているのだから、多分また次に改良版が出る時には、もう少しそこら辺は分けて出てくると思います。

それで、私は有権者教育と考えた時には、やはりただ単に「こういうふうに投票しなさいよ、投票箱にこう入れるのですよ。」という問題もいいけれど、「投票に行かなかったら若者たちはこれだけ損をしますよと、具体的にあなたたちに返ってきて、これだけ損をしますよ。」というようなことを教えていく必要がある。もう一歩突き詰めていくと、今の選挙制度の問題とかは、全然ここでは触れてはいないのです。「今の選挙制度を前提にした上で、投票しましょうね。」という話になっているわけです。けれども、もっと言うと、今の選挙制度というのは、「シルバーデモクラシー」に基づいて、老人の方が有利な選挙区の割合になっているのじゃないか、もっと若者に有利な選挙区制度に変えるべきじゃないかというような、選挙区制度に踏み込んで議論するというようなことは、ある意味タブーと言ったら言い過ぎなのですけれども、それはやっていないのです。あくまで現状が前提になった有権者教育なのです。ですから、そこにはやはり、若者たちは不満を感じる部分も多分出てくると思います。

一方で、主権者を育てたい、それは単に投票するという事だけではなくて、地域を変えていきたいという主権者を育てたいというような意味で言うと、それをもうちょっと表に出していく主権者教育でないと、ちょっとそれはごちゃごちゃになったような現状なのかなと思っております。

それから、どういう問題を子どもたちに考えさせていくのかということとは、非常に大きなことなんですけれども、小さな問題と大きな問題があると思います。国連のような難民の問題ですとか、安保の問題ですとか、それはかなり大きな問題です。シティズン

シップ教育で言われているのは、大きな問題もいけれど、小さな問題、もっと身近な問題、自分達がやったことによって何かが変わっていくという、そういうような、これまで自分がないがしろにされてきたのだけれども、自分達でも関わっていける。その中から、成功感みたいなものを持っていける、そういうことをもっとやっていかないと、大きな問題ばかりでは無理なんじゃないかということも一つ言われております。

その時に、私、先ほどちょっと言わなかったのですけれども、体験を持つのも大事なのですが、調整という言い方をしたのですけど、政治的リテラシーの話の時に、そこで大事なものは、妥協という感覚だと思っているのです。けれども、これはなかなか、シティズンシップ教育でもそこまでやったらやり過ぎだとか言われて扱わないことが多いのですが、今、当面妥協して我慢する、一步後退するけれども、明日は二歩前進する。そういうことに対する信頼ということが重要だと思っていまして、それが民主主義そのものに対する信頼でもあると思うんです。そういう感覚を、子どもたちにどういうふうにして付けてやるのかということが、シティズンシップ教育の中の大きな課題なんじゃないかなと思っています。以上です。

#### <大村知事>

ありがとうございました。先ほど言われた主権者教育と有権者教育のところは、全くおっしゃるとおりかなと思います。私は、今度選挙権があるのは高校3年生ですが、高校3年生で例えば、若者に有利不利な選挙制度というような、そこまでの議論にいかどうかと思うのですけれども。そこまで意識があるか、そこまで知識があるかというようなことはあるかとは思いますが、ただ、政治とか世の中を語る時に、まずは現状に対する分析、批判から入るじゃないですか。「こんなんでいいのか。」とか。そういうことを学校の教育の時間でいっぱいやってもらったらいいと思うのです。

ただ、例えば選挙を間近にして、「この政党はいいぞ。」とか「ここに入れろ。」とか、そういうのはダメだと思います。それは明らかにダメだと思いますが、今のこの現状でいいか、このことについてどう思うか、こういう今の経済政策でいいのかとか、そんなことに高校生がついていけるのかどうかは別として、そういうことを議論すれば、当然批判はあるのです。それがどうも、そういうことは偏っているからいかんとかいうようなことを言っている政治家がいるような気がしますけどね。ちゃんちゃらおかしいなど。全く分かってないなど。もしそんなおかしげな変な通達が文科省から出てくるのであったら、そんなもんけたくってやろうというように思っていますけれども。

要は現場ではできるだけ幅広く自由闊達<sup>かっ</sup>に議論すれば批判があるのは事実で、それは当たり前のことであって。あれがいかん、これがいかんということで、現場が萎縮したらロクな教育にならないと思いますから、そこは自由にやらしてもらえばいいと。ただ、行き過ぎたら、当然生徒さんは家に帰ったら言うと思いますから。行き過ぎたことをや

れば、やった先生が批判されるのは自己責任ですから。そこはそういう形でバランスが取れていくと思います。あれやっちゃいかん、これやっちゃいかんということは、厳に慎むべきだと思います。今、先生のお話をお聞きして、全くそうだなと思いました。はい、ありがとうございました。

それでは、江口様、よろしく願いいたします。

<名古屋学院大学現代社会学部教授 江口忍氏>

先ほど半分くらいしか話せなかったのですが、残りをお話させていただきます。

最初に、先ほど水山先生の方から副読本について、これは有権者教育と主権者教育がごっちゃになっているというお話で、「ああ、なるほど。」と思いました。私は、パッと見て気付きませんでした。私はこの副読本自体はよくできた本だと思います。有権者教育という視点で見ると、今まで学校で教えなかったことをちゃんとやっていて、テキストとしての出来はなかなか良いと思います。ただ、ひどいと思うのは、教師用の指導用マニュアルを見ると、ほとんど、「あれやっちゃダメだ。」「これやっちゃダメだ。」ということが羅列されていて、これを見ると「なんだ、何もやっちゃダメなのか。」と読み取れてしまうのです。だから、前の発言の機会でも申し上げましたが、アクセルを踏みたいのか、ブレーキを踏みたいのか、どっちなのかよく分からない。

これとは直接関係のない話ですが、例えば、電波行政を司っている大臣さんが、「変なことを言うと放送局の電波を止めさせるぞ」というようなことを言う方がいらっしやいます、何かそういう雰囲気の中に身を置いていると、やっぱりこのテーマというのは触りにくいな、正面からは扱えないと思ってしまうところがあるのではないかなと思って、大変危惧しております。

その点、先ほどから何度も大村知事の方から、「それは現場の方で自由にやってもらいたい。」というお話がありましたので、運用のところなるべく自由度を高めるというようなやり方が、愛知県においてはやりやすいのかなと期待をしております。

それに関連して、また話が戻るんですけども、資料（児童生徒の市民性・社会性を高めるシティズンシップ教育に関する取組）の10ページ目の二つ目の四角のところの「高等学校等の生徒の政治的活動等」についてのところで、ここに3つ〇があるんですけども、当然ながら、先ほど知事も何度もおっしゃられているように、学校という場での政治的活動においては、自ずと制約があるのは当然のことであり、〇の一つ目、あるいは二つ目で、学校の施設の中での政治的活動等は制限とか禁止をすることが必要という、これは非常に分かるのです。

議論が分からないのは、三つ目の〇のところだと思うんです。「放課後や休日等に、学校の構外で行われる政治的活動等については、違法なもの等は制限又は禁止されるほか」、それは当たり前ですね、問題は後段の「学業や生活に支障があると認められる場合など

は、必要かつ合理的な範囲内で制限又は禁止することを含め、適切に指導を行うことが必要」と。これは、普通に読むと「やるな」というように見えるのです。わざわざ、「必要かつ合理的な範囲内で制限又は禁止することを含め」というこの文言は、意味的にはなくてもいいのですが、あえてそれをここにぶち込んでいるというところに、この文書の意味合いがよく現れているのだらうと思います。

これが現実的に問題になるような、一番イメージしやすい例として考えられるのは、昨年の安保法制の時に、「SEALDs」がいろいろ活動をして、世の中の関心を集めた若者の政治活動の一つのあり様として、ああいうことが行われた。「SEALDs」に関しては、好意的な考え方から、あれはけしからんという考え方からいろいろあるとは思いますが、政治参加について若者の関心を引き起こすきっかけになったということは事実だと思います。そういう行動というものも、この三つ目の○にひっかかると、確かに解釈をすれば、「学業や生活に支障があると認められる場合など」、これは要件としては際限のない話で、こんなことを言えば、部活だってバイトだって皆、ダメって言えばダメということになってしまうわけですから、当然解釈によっては、「SEALDs」みたいなのはけしからんとなるわけですが、ここのところも、先ほどの教員の個人的な主義主張を述べるという話と重なるのですが、その行為自体が本当に法的にまずいとかならば別ですが、学校外で休みの日にやっていることに関して、基本的にはそれはそれぞれの判断でやってくださいというのが、私は適切ではなかろうか。

そういう中で、ある人はある考え方を持ち、別の学生は全く違う考え方を持つということで、いろんな考え方を持った人がたくさん出てきて、その中で議論が行われて、社会全体における政治に対する関心とか、そういうものを議論できるような風土が醸成されていけばいいと思います。ここに関して私の言いたいことは、もちろん「ヘイトスピーチ」のような人権に引っかかるような話に子どもたちが関与するようなことは避けさせるべきだというように考えますが、そうでないものには、主義主張がどちら側であれ、基本的には「好きにせいや」というような運用が期待されると思います。

それからもう一点、さはさりながら、現実には先ほどの話に戻るのですけれども、教員の人たちに、今の社会的に大きなトピックスで言うと、安保法制の話とか、沖縄の話とか、原発再稼動の話とか、そこのところを自分の考え方を言わずに授業を成り立たせるというのはきわめて難しいだらうと思うのです。そういう点で言うと、地方自治は民主主義の学校という言葉が昔からありますが、地方の政治についてはより身近に感じられることでありますし、扱いやすさという部分で言っても、国政で安保法制とかということに比べると、割に扱いやすいというか、触れやすいというのか、例えば、私がこの間大学の授業で触れたのですが、法人住民税を国が愛知県、特に豊かな自治体から召し上げたという話があり、あれを一つのきっかけに地方と国の関係、地方自治のあり方というのを考えてもらおうといった授業を1回やったんですけれども、地方自治というのはそ

ういう点で言うと、政治的リテラシーの涵養にはコンフリクトなく扱えるテーマであります。愛知県のこの先のそういう教育においても、特に地方自治に関しては、積極的にいろんな形で触れるようなことがやっていけばいいのではないかなと思いました。以上です。

<大村知事>

ありがとうございます。もう、こういう通達が出ているんですね。しかし、「学業や生活に支障があると認められる場合」って、確かにおっしゃるとおりです。そんなこと言ったら、夏祭りの夜店に行っちゃいかんという話ですね。そんなこと止められないのでみんな行ってる。学校の先生方の生徒指導とか、腕章巻いて一生懸命、夜、回っている。よく街中で会うけど。そんなこと言ったって、高校生は、みんなほつき歩いているので、そっちの方がよっぽどあれだと思うけど。

文部科学省のアリバイづくりだな、という気がします。こんなこと、厳密にやるころはないと思います。少なくとも、愛知県は自由にやってもらっていいと思います。萎縮せずに。こんなことを気にせずに行ってもらったらいいいと思います。聞かれれば、私はそう言いますが。まったくこんなもん気にしなくていいと。こういうことだと思えます。では、すみません。余計なこと言いました。

それでは、柴山様、よろしく申し上げます。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

今の主権者教育・有権者教育の件ですが、私はちょっと考えが違ってまして、高校生はまだ親の保護下にありますので、有権者の権利ができたとはいっても、一方で社会的な義務だとかそういったことについて、十分な役割とか覚悟ができてない「ひよっこ」の段階ですので、あまり行き過ぎた政治活動だとかいうことは、一方で制限をせざるを得ないと思います。これから先は長いので、社会へ出て大人になってから、自分の判断でやればいいと考えてます。ですから、いわゆる若葉マークの頃は、あまり過激な方へ走らないような、ある一定の制限の中でやっていくのが一番いいのではないかなと。やがて、1年後あるいは4年後には社会に出ますので、その後でいろいろ自分の判断で考えればいかなと思います。

ちょっと話は違いますが、これはシティズンシップ教育で、先ほどいろいろ学校にお願いばかりしましたけれども、一つ大事なことは、ここでいろんな勉強をした学生さんが社会に出たときに、果たしてその人たちが納得できる社会になっているかという、正直言って、企業でも御承知のように様々な不祥事が出たり、あるいは従業員も規範意識が下がってきてます。社会性も、先ほど若い人の批判をしましたが、実は働いている社員自身も社会性あるいは社会に対する関心、こういったものについては、少しずつ低

くなっているというのが実態です。学生さんに対する教育ばかりではなくて、もうすでに社会人になっているような人たちにも、繰り返し教える必要があるのではないかなと思っています。そのためには、産業界、労働界、様々な分野に協力をしてもらって、県民運動として県民の意識を高めていかないと、せっかく学校でいい勉強をして、社会に出た学生さんが、社会に出たとたんに「なんだ、社会はひどいな。」「学校で習ったことと現実とは全然違う。」と、これではちょっと大人は恥ずかしいので、ぜひ教育界だけの取組にせず、いろんな所を巻き込んで大きな活動にしていただければ大変ありがたいと思いますし、私どもも是非協力をさせていただきたいと思っております。以上でございます。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

学校教育という中で考えているのですが、そういう点では、今回の選挙との関係があって、こういうクローズアップがされたと思います。いずれにせよ、義務教育と、高校までと、大学とでそれぞれ教えることは違ってきます。高校までに今の選挙を考えていく上でいろいろ教えていかなければいけないことは事実だと思うのです。

今、知事が文科省のこういうのを読んで、大体こんなもんかと思うようですが、それを越えて、学校が子どもたちを主体的にできるようにしていくのが、学校教育の一つだと思うし、知事がそういうお考えを持ってくれるなら、学校ももっとのびのびやっていたほしい。一つはもちろん高校までに、こういう教育をどこでどうするかということ。そういう点で、いろんなところで始まっている生徒会活動とかいろいろ活動しています。私もかつて自分の高校でやりましたが、われわれの高校の時は、丸坊主で、霜降りのズボンしかいかんと、革靴はいかんと、という形であったのを生徒会活動で変えてもらうよう努力しました。そういうところから、教育の中でできる活動を子どもたち、生徒たちに考えさせてやっていくところと、基礎的な知識は教えなければいけないところがある。そこはうまく分けていかなければ、教育は成り立っていかないと思います。先ほど批判的思考と言いましたが、それも、自分がやることと与えられたことが本当に合致するかどうか、合わなかったらどうするかということを考えていくのが、私は批判的思考だと思うのです。そののところが履き間違えてはいけないと思っています。

特に先ほどSNSの、私もラインをやっていますけれど、ある面で、ものすごく怖さの方が大きいのです。顔が見えなかった時の人間の恐ろしさっていうのは倍増、3倍、4倍になると思うのですよ。だから、私は、本音と建前を両方使い分けないと社会の中に生きていけないことは確かですし、みんなも思っているわけ。本音と建前で、建前だけで学校は生きているかというところ、「そうじゃない。」というところだけの認識を子どもにも持ってもらわないと。「先生を批判しちゃいかん。」というのも、すごく割合が多いのです。これもいろんな要件が重なっています。先生が権威主義であるかどうか

かりません。多分家庭の教育も引っかかってくると思うのです。あまり先生を批判すると「だめだぞ。」ってやっているかもしれない。それはわからない。そこを含めて、我々は「出る杭は、打たれる。」ということは、今まで持っていたけれども、いくつかあちこち出れば「出る杭は、打たれない。」ということをして今、書いているのですが。もぐら叩きも一つ出るから叩かれるのであって、いろんな所からいろんな声が出れば、叩くことは疲れちゃうわけです。それぞれが自分の思っていることを出して、それぞれが違っているということを認めていくような教育がされないと、これからの社会の中にグローバル化になっていかなければいけないと思っております。

もう一つですね、先ほど河合塾から出ましたが、模擬国連に出席した人の報告会に出ました。はっきり言います、それまでの基礎がないと、びっくりして帰ってくるだけです。まず英語力で劣ってしまう。自分の意見が述べられずに帰ってきます。それで、外国の人の発言の多さにびっくりして帰ってきます。ここは、もう少し前から、いろんな自分の意見を述べる、あるいはいろんな違いの中で生きていくということをしていかなければ、ある面で批判的思考も育たないし、社会の中で自分の立つ位置ということをしっかり認識できていかなければいけないのではないかという思いがあります。

<学校法人河合塾中部本部長 室崎欣彦氏>

河合塾的な考察になりますが、今回のテーマをお伺いした時に、我々が予備校の現場として結構困っていることがあります。それは何かというと社会性だとか倫理観だとかって言葉がワードとして出てきますが、我々は倫理観みたいなことを結構時間を費やしているのです。

医学部を目指す子たちは、ずっと減少なしです。少子化でどんどんいろんな学部が生徒を減らしていく、志願者を減らす中、それから文系・理系といった大きな波の中で志願者が動く中で、医学部だけはずっと一定です。ただし、どんどんどんどん倫理観がなくなっていくのは、実感としてあるのです。そういった中で、我々がどうやったらそういうことの教育ができるのかということです。勉強ができるからお医者さんになる、それはそれで必要なことですが、それだけじゃないだろうって。むしろ、順番からいうと倫理観というものがあつたりすると。それは法学部へ行って、司法試験を狙いたいんだという子たちの社会性だとか倫理観だとかいうのもどうなのかというのは、非常に危ういということです。実は、授業をして、教科をしている以外のところで、いっぱい講演会を開いたり、現場の人を呼んできたりすることをやるんです。そして、そういう人の話を聞いて、「自分はその人たちと同じことをやっていくのか、その世界に入れるのかってということをちゃんと考えてくれよ。」ということをやっている。小論文とかなんかも、テクニックで教えるのではなくて、本当に自分の言葉として書けるようになるまで、それを、繰り返しやるのだよということをやっていくわけです。これが、以前と

比べると非常に時間がかかることになってきているということが実感としてあるというのが一つ。

それから、この後の高大接続、大学入試なんかは、変わっていくわけですけど、その求められる学力というんですかね、本来、本当の意味での力とは何なのかということ、我々も新しい物差しを作っていないといけない。例ですが、今年の春からリリースをする新しい試験があるのですが、4つのカテゴリーでいろんなものを見ていきましょうという中で教科学力、現状の認識の学力、その次が大学・社会で活躍する力ってこういうことなんだよということを一応測ってみよう。それからキャリアに対する意識です。自分がどういうことを意識して、何に関心があるの、どんな興味があるのっていうことを調べてみよう。それから、学習、生活のパターン。特に、この生活のパターンと動機付けというものが、非常に密接に関係してくることがわかってきていますので、そういうものを数値的にある程度見て、それをどう変えていったらいいのかということをおアドバイスしていく。そして、「そのためにこんなことをやっていいよ。」と実際の実践に提供していくものとして出していくということ、非常に時間をかけて研究しているわけですよ。そういったものをやり始めるということで、特に現場的には、プランニングというのが非常に大事になってきて、それは生活態度だとかそういうところからちゃんと直していかないといけないよ、ものの考え方から直していきましょうね、直すっていうか、そこをちゃんと見つめてみましょうね、ということをお名前をプランニングという名前で呼んでいるのです。そういうことをやるというようなことも、新しく時代が変わるんだということ、一番最後のページには今年の河合塾のポスターですけど、「考える力で、生きていこう。たとえ時代がどんなに変わっても」というコピーですね、こうやって、今の時代を生きていく若者をどう育てていくかということをお考えながらやっています。

<漫画家 江川達也氏>

河合塾さんにお伺いしたいのですが、いつから方向転換をされたのですか。

<学校法人河合塾中部本部長 室崎欣彦氏>

これはですね、随分時間をかけていますので、もう10年どころではなく、もっと前からです。20年以上前から、このあたりの気付きは自分たちにもあって、何とかしないといけないと思っていました。形として、テストというようなことになるのは、ここ数年ですが。

<漫画家 江川達也氏>

いや、素晴らしいなど。

私のお爺さんが名城大学で先生をやっていたころ、河合さんが仕事なくてどうしよう



というときに、塾をやったらいいと助言して河合塾ができた。母親がそう言っていたけど、どこまで嘘か分かりませんがね。

それは置いておいて、河合塾さんはすごい。民間企業の現状への対応力はきちんとしているなど、認識を新たにしました。先程、政治的な議論を子供たちがする、それに先生がどう関わるのかという話が出ていました。ネットでも「SEALDs」のような人たちが出てきていろいろやっていますが、私から言わせれば、あいつは馬鹿じゃないかというのが一番。議論をするのは良いのですが、子供が自分の意見を言うのは良いことなので。そうやって議論をし合うことによって、知識偏重から自分の意見が変わっていく、それが一つの過程なのですが。やはり実際に議論をするときに、防衛問題を考えて議論しようというときに、あまりにも予備知識がなさ過ぎて、妄想で語っているところが相当ある。知識偏重から議論、その後また知識に戻って、経験があって知識というように、繰り返しなんでしょうと思うのです。本当に学校で何を勉強してきたのかという。

要は、議論の次に、やはり自分ももっと勉強しなければということに目覚めるべきだということです。目覚めるように指導する。あと、先生がどうもマルクス・レーニン思想の知識ばかりがあって、それを一生懸命教えるのですが、防衛問題などを議論するにあたって、戦争の歴史を知らないと言えない。なのに、ほとんどの人は戦争の歴史を知らないわけですよ。自分は、「日露戦争物語」という漫画を書いたことがあったので、近代における戦争の発達といったことを勉強して、今まで学校で教えているものとは全く違う知識、事実を、原典を読むなどして知ると、世界観が全く変わる。それが全てではないですが、ある種の思想に基づいた知識ばかりを教えると、やはり偏った意見になってしまう。もっとグローバルに、いろいろな視点から物事を吸収できるような素地を提供する、そういう学校であって欲しいと思います。

図書館に行っても、戦争史の本などはほとんどない。防衛大学や防衛研究所防衛戦史資料室などに行くと山ほどあるのですが、そんな場所に普通の学生は行きませんがね。それを原文で読むといろいろ変わってくる。

あと、思想史だけではなく経済史という観点から世界を見れば、また違った意見も出てくる。そういう、いろんな知識を得られるような環境を、図書館といった場所に置いておいて、議論のときに調べられる形をとっていかないと、やはり偏ってしまう。学校の先生も、いろいろな方向からの知識が得られるんだということをナビゲートできる存在であったほうが良いのではないかと思います。

国家を論ずるにあたっては、表面的な知識ではなくて、実際に使える知識が必要。知識をどうやって取り入れていくかというところで、本人がどう生きてきたかということがすごく大事になる。社会性を身に付けるということでは、今までの学校ですごく良かった部分があって。学校祭というようなことは、どうやら欧米の学校ではないようです。

学校祭、学校行事をやることで、社会性が身に付くということは、自分の経験でも思います。クラスで何かをやるとうきょうきに、だいたい言い出しつぺは偉そうなことだけ言って途中で遊んでしまう。縁の下の力持ちのような人がどうにか頑張って成功させると、最初に言い出した責任感のない人が「俺がやった。」と言ったりするということをして、嫌というほど体験してきて、そういう人とは一緒に仕事したくないなど。そうやって学習をするわけです。

先程の例に出てきた、地域の活性化のために、学校の生徒も考えながら商売を考えると、実際に生きていく中での活動を通して、ものを生み出したり展開していくことをやっていけば、社会性は身につくのではないかと思います。半年くらい学校祭やっても良いのではないかといいうくらい。毎月あっても良いのではと。実際の商売のような形で、それをだんだんと地域社会にも広げていって、そこから起業ということも生まれると思うので。今までの学校の良い部分は残していけば良いと思います。

<大村知事>

ありがとうございました。

確かに、政治的な議論をするにしても、高校生にどこまでできるのかということはありません。ある程度のレベルの高い議論でなくても、議論をすることに意味があると思うので、江川さんが言われたように、議論をして、考えて、予備的知識がそれほどあるとは思えないので、勉強をして知識に戻る。そういう形でやっていくということ、良いのではないかと思います。

江川さんが書かれた「石原莞爾」を以前読ませていただきましたが、あれを書くのにもすごく資料を集めて予備的な検証をしないと書けないですね。

<漫画家 江川達也氏>

そうですね。石原莞爾を肯定的に見ている本と否定的な本を両方読んで、石原莞爾本人の著作も断片的に読みながら、自分で資料を調べました。議論をした後に、また自分でも調べてということをして、能動的に物事を調べる能力を付けさせる。そのモチベーションはどこで付くのか分かりませんが、議論をすることによって付くのかもかもしれません。

<大村知事>

議論をするからモチベーションが付くのではないですか。それはあると思います。

<漫画家 江川達也氏>

そうですね、私の場合、モチベーションは受けてきた教育に対する復讐心ですけどね。何でそんなにマルクス・レーニン主義ばかり押しつけるんだという、事実は違うのでは

ないかと。そこから実際に、戦後書かれた本ではなくて、戦前とか明治、江戸時代に書かれた本を原文で読むことで、自分で解釈することが必要なことなので。逆に、歴史教育イコール古典の教育だったりもする。古典が読めないと、原文が読めないの。一番遡って源氏物語を読みましたが。

<大村知事>

源氏物語は難しいですね。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

日本の高校の歴史教育は、古くからいいますが、外国は逆で、現代から入っていくんです。現在から見て、どうなってきたかを考えていくのが歴史教育です。日本の場合、古代の古いほうから来て、ある時代で終わってしまう。現代から入り、今がどうなっていることからやっていくほうが、今の自分たちが立つ位置だとかが考えられると思うのです。高校では行われてきているとは多少聞いていますが。

<大村知事>

昔は戦後の歴史は時間がなくてやらなかったが、今はやっているでしょう。

<漫画家 江川達也氏>

やってますけど、非常に建前的で。本音を言うと政治的にアメリカとかうるさいですよ。

<大村知事>

戦後だと、国内的な政治が絡んでセンシティブだから、みんな遠慮するということもあるのかな。

<漫画家 江川達也氏>

戦前の隠された歴史が山ほどあるので、それを漫画にしたいなと思っています。

<大村知事>

是非、青少年向けにそうした硬派なものを。

<漫画家 江川達也氏>

基本的に売れません。

<大村知事>

売れるのは硬派ではないものというのはよくわかりますけど。それを含めて、これからもよろしくお願いします。

<日本シティズンシップ教育フォーラム副代表・京都教育大学教育学部教授 水山光春氏>

せっかく寄せていただきましたので、最後に一言、申し上げさせていただきます。

主権者教育に関して、戻ってお話をさせていただきたいのですが、先ほど、中野様の方から、「出る杭は、打たれる。」というお話がありました。主権者教育の問題では、私はかなり深刻に感じています。高校の先生で、一生懸命おやりになると、メディアはかなり叩いてやろうと待ち構えているわけです。やりすぎた学校が、多分、スケープゴートのようにして叩かれたりすると思うのですが、その時、是非、知事や教育委員会の方々に、守っていただきたいと思います。先ほど知事からは「もっとやれ。」というようにお話がありましたが、やはり、励ましていただかないと、全体が萎縮してしまうということはあると思いますので、是非、お願いしたいと思います。

それから、もう一つは、現場の高校の先生たちは、一人一人孤立していますので、自分の世界の中でどうすれば良いのだろうと悩んで考え込んでいると思います。先ほど、江口様がおっしゃったように、副読本を見て、何もできないのではないかという感じで、萎縮していらっしゃるのではないかと思いますので、是非、選挙管理委員会の広報担当部署の増員をしていただいて、高校の先生の質問に対して、親身に受け答えしていただきたい。そうすると高校の校長先生も、選管が言っているならオッケーなのではないかと思えるので、是非、教育委員会と選挙管理委員会の間で連絡を取っていただいて、選挙管理委員会をもっと活用していただきたいし、そのためには、選挙管理委員会も余裕が必要かと思っておりますので、そんなことも考えていただきますと、愛知県の主権者教育はスムーズに進んでいくのではないかと思います。是非、お願いしたいと思います。

<大村知事>

よくわかりました。先生が言われたとおりだと思います。マスコミが行き過ぎたということを狙っているわけですか。あるかもしれませんね。私は、明らかに選挙前に特定の政党のビラを学校で配るとか、明らかにこういうのはダメですが、自分はこう思うと、主義主張というか、例えば、自分は沖縄の基地問題でこう思うと、日米安保についてはこう思うと言った上で生徒にどう思うのだと聞くのはありだと思います。それは、自分の考えを言わずに意見を聞くということの方が、むしろおかしいような気がしますからね。愛知県内でもしこのようなことがあって、あげつらうような方があったとしても、程度もあります。明らかにというのはダメですが、そうでなければ、私は一切、あげつらうようなことはダメだということ。

<漫画家 江川達也氏>

最初に、先生の意見はこうだけど、それは「テストの点には関係ないよ。」と言ってくれれば。

<大村知事>

それはそうでしょう。

<漫画家 江川達也氏>

いやいや、そういうテストを出されたんで。

<大村知事>

昔はそうであったかもしれないが、今もあるのかね。わからんけど。そういうことであげつらうようなことは、愛知県にはないようにしますので、しっかりやっていきたいと思っております。

活発な御意見をいただきまして、ありがとうございました。最初、シティズンシップ教育ということでやりたいと、先月、私のところに事務方が、相談に来た時に、これで議論が盛り上がるのかな、お通夜みたいな2時間になるのではないかと思いましたが、私の意に反して盛り上がったような気がします。ありがとうございました。自由闊達な御議論をいただきまして、ありがとうございました。今後の愛知の教育にしっかりと生かさせていただきますので、これからもよろしくお願いします。